

## Injury Alert (傷害速報) 類似事例

## 犬による外陰部外傷 (No.02 犬による外陰部外傷の類似事例1)

事例	年齢：0歳10か月 性別：男児 体重：6.25kg 身長：64.5cm
傷害の種類	外陰部(犬)咬傷
原因対象物	犬(シェパードとの雑種・中型犬) (1年前動物愛護団体から引取り室内で飼育していた、狂犬病ワクチン未接種)
臨床診断名	両側陰囊皮膚欠損、両側精巣欠損、陰茎皮膚欠損、亀頭部分欠損
医療費	約300万円
発生状況	発生年月・時刻 2019年3月X日(火) 午前2時30分頃
	発生時の詳しい様子と経緯 母は夜間シフト制の勤務中で不在。父が前日午後11時頃姉(3歳)、兄(2歳)と本児の3人の兄弟を寝室の布団で一緒に寝かしつけ、父は隣室のソファで寝ていた。自宅にベビーベッドはあり日中使用していたが、夜就寝時は普段から床に敷いた布団に家族全員で寝るようにしていた。室内で飼育していた犬も部屋に自由に入出りできる状態であった。母が仕事から帰ってきたら児が泣いており、様子を見に行くと裸で泣きながらハイハイをしていた。おむつ、洋服は破損していて血液が付着した状態で落ちていた。陰部から出血があることに気づき、救急要請。父は今回の受傷に気づかなかったとのことであった。
治療経過と予後	来院時、陰囊・両側精巣は認めず、亀頭もはっきりしない状態であった。破傷風トキソイド(4種混合は3回接種済)と抗生剤を投与した後、転院となった。転院時のバイタルサインは、体温37.4度、心拍数180回/分、血圧96/74mmHg、SpO <sub>2</sub> (酸素投与下)100%、呼吸数30回/分で、両側陰囊皮膚欠損、両側精巣欠損、陰茎皮膚欠損、亀頭部分欠損がみられた。体幹には新旧混在した搔抓痕のみで出血は認められなかった。直ちに手術(外尿道口形成、経皮的膀胱瘻造設、デブリドマン)施行された。手術中の出血量は5mLであったが、Hb7.1g/dL(転院前9.2g/dL)と低下しており、手術中に赤血球液の輸血60mLを行なった。術後、肉芽の盛り上がりを待ち、21日後に尿道カテーテル抜去、23日後に膀胱瘻抜去を行ない、自排尿の確立を確認した。また受傷の状況や受傷時の体重が-2SDを大きく下回っていたことなどもあり、児童相談所により一時保護にて入院を継続したため、退院先の調整を行い48日後乳児院へ退院となった。

## 【こどもの生活環境改善委員会からのコメント】

1. 近年、犬を室内で飼う割合が年々増え 2019 年には飼い犬の 86%が室内犬となっており<sup>1)</sup>、犬はより一層家族の一員、伴侶動物として扱われるようになってきている。環境省自然環境局の調査による犬咬傷の事故件数は年々減少傾向であるものの、2018 年度の被害者は 4,384 人であり、年次によっては死亡例も年平均で 3 人ほど報告されている<sup>2)</sup>。
2. 犬咬傷の対象は、3-6 割が小児<sup>3-5)</sup>である。国内の報告では、犬咬傷小児例の受傷時年齢は平均 7.3 歳、男児が 3 分の 2 を占めていた<sup>3)</sup>。また小学生以上では四肢を咬まれること多いが、4 歳以下の幼児では約 40%が頭や顔を咬まれている。これは犬の顔の高さに幼児の顔があること、また年少児は犬に押し倒され咬まれたことが推察される<sup>3)</sup>。
3. 一方で、本児のような陰部受傷は犬咬傷の 1.4%と稀である<sup>4)</sup>。犬による陰部咬傷 21 例をまとめた報告によると、大部分が飼い犬による受傷であった<sup>6)</sup>。陰部咬傷 21 例中 19 例が男児で、そのほとんどが精巣欠損などの重篤なものであった。年齢は生後 3 週間から 13 歳までだが、乳児例が 3 割を占めた。日本では生後 6 週から 1 歳 4 か月まで、計 6 例の男児の報告がある<sup>7-11)</sup>。これらの報告より、乳児とりわけ男児は、犬による外性器咬傷のリスクが高いことがうかがえる。乳児早期に多いのは、自力移動ができないためと思われる。陰部咬傷の原因は、犬がおむつの尿臭をえさと勘違いするためとの報告<sup>8)</sup>があるが、詳細は不明である。
4. 本事例を含めた日本の陰部咬傷 7 例の発生場所は、室内が 5 例（残りは不明 2 例）で、犬も児も放置されている状態であった<sup>7-11)</sup>。陰部を咬傷した犬は、犬種の記載があった 4 例中 2 例（両側精巣欠損・右側精巣摘出）がミニチュア・ダックスフンドであり、小型犬であっても決して安全とはいえない。またゴールデンレトリバーによる 8 か月女児の死亡例<sup>13)</sup>もあり、温厚と思われる犬種であっても時に加害犬となる可能性があるため、犬種にかかわらず、抵抗のできない乳幼児と犬を一緒にして放置しておくことは危険である。
5. 小児の犬咬傷予防については、下記のことがあげられる。
  - ・短時間であっても小児と犬を一緒にして放置しない<sup>5)</sup>。
  - ・犬を室内で飼育するときには、低月齢児はベビーベッドで寝かせる。中・大型犬やジャンプ力に優れた小型犬の時には、ペットゲートやサークル、ゲージの使用を考慮すべきである。
  - ・犬を去勢する<sup>5)</sup>。
  - ・子供達に対して、家庭や学校で、犬咬傷事故防止に関する教育を行う<sup>14)</sup>。などがある。

本事例は、乳児と中型犬を同じ部屋にして放置した結果、陰部損傷を発生していた。小児科医として我々ができることとしては、こういった事例が発生することを念頭に、上記の犬咬傷予防策を保護者に繰り返し伝え、広く啓発していくことが何より重要である。

## 参考文献

- 1) 令和元年 全国犬猫飼育実態調査. 一般社団法人 ペットフード協会.  
<https://petfood.or.jp/data/chart2019/index.html> (参照 2020-02-07)
- 2) 動物愛護管理行政事務提要 (平成 29 年度版). 動物の愛護と適切な管理 環境省自然環境局相総務課 動物愛護管理室.  
[https://www.env.go.jp/nature/dobutsu/aigo/2\\_data/statistics/files/r01\\_3\\_3\\_1.pdf](https://www.env.go.jp/nature/dobutsu/aigo/2_data/statistics/files/r01_3_3_1.pdf)  
(参照 2020-02-10)
- 3) 子どもと犬咬傷 県立中部病院・小濱守安  
<http://www.okinawa.med.or.jp/old201402/healthtalk/gusui/2006/data/20060510n.html>  
(参照 2020-02-07)
- 4) Erin M, Denice K, Rebecca R, et al. Morbidity of pediatric dog bites: A case series at a level one pediatric trauma center. *J Pediatr Surg.* 2015; 50 : 343-346
- 5) David A.Hunstad. Animal and Human Bites. *Nelson Textbook of Pediatrics.* 21th Edition. ELSEVIER. 2019 : 3816-3819.
- 6) Bertozzi M, Appignani A. The management of dog bite injuries of genitalia in paediatric age. *Afr J Paediatr Surg.* 2013; 10: 205-210
- 7) Donovan JF, Kaplan WE. The therapy of genital trauma by dog bite. *J.Urol.*1989;141: 1163-1165
- 8) 古賀まゆみ, 伊住浩史, 井上保, 他: 乳幼児の重症事故症例の検討. *小児保健研究* 2002 ; 61: 525-530.
- 9) 中島有香, 長村敏生, 久保田樹里, 他: 外陰部犬咬傷. *小児外科* 2008 ; 40 : 1276-1279
- 10) Nara T, Hisamatsu E, Haruna A, et al. Bilateral Testicular Loss due to Dog Bite in a Chile. *APSP J Case Rep.*2017 ; 8: 20
- 11) 林悠大朗, 寺西淳一, 高木大路, 他. 犬咬傷上により片側精巣を喪失した 1 例. *日本小児泌尿器科学会雑誌* 2018 ; 27 : 298
- 12) 小菌喜久夫, 横田和典, 西村篤, 他. 犬咬傷 138 症例の検討. *形成外科* 1997 ; 40 : 259-264
- 13) Pinckney Le, Kennedy LA. Fractures of the infant skull caused by animal bites. *AJR Am J Roentgenol.* 1980 ; 135: 179-180
- 14) 水越美奈. 子供に伝える犬と仲良くなる方法. 日本獣医生命科学大学  
[http://www.machida-aigo.jp/docs/20120603\\_sympto\\_mizukoshi-sensei.pdf](http://www.machida-aigo.jp/docs/20120603_sympto_mizukoshi-sensei.pdf)  
(参照 2020-1-31)